

図書館通信

—34—

1975.11

南アルプスの自然

杉山 恵 一

突然、道は傾斜するのをやめた。ふと頭を上げた私の眼前に神々の座が鎮まっていた。

今年の夏、私は南アルプスの聖岳に登山した。大規模な森林伐採にさらされた南アルプスも、この辺まで奥まった場所ではまだ原始の息吹きを感じることが出来る。聖岳の巨大な山腹に白々と輝く枯れ木、大音響とともに数百米を転落する岩石、谷から立ちのぼるやたちまち雲と化し、天空にかけ登る水蒸気、そこには荒々しくも瀟々たる自然が、自然の名に恥じない営みをくりひろげているのだった。

南アルプス……この名称はしかしながら私に抵抗を感じさせてきた。一体何故極東の一島国の最も特異な自然をよする地域に、イタリアとフランスの国境にある山岳地帯と同じ名称が与えられなければならなかったのか。例え外国人によって名づけられたにしてもそれを踏襲してあやしまないことを私は不思議に思う。南アルプスなどというペンキ塗りのような名を冠するにしては、第一個々の山の名、谷の名が風格がありすぎるのだ。それらは、いまだ文明に浴することなかった時代の山人たちの畏敬に充ちた感情を伝えてあますところがないような気がする。例えそれらが大きな展望に立っての命名でないにしても、彼等の重厚な生活の匂いを感じとることが出来るのだ。しかしそれはさておきとして、南アルプスの地勢を簡単に述べることにしよう。先づ静岡県の地図を頭に浮べていたゞきたい。北方の県境が中央部で不思議な形に突出していることを記憶しておられるに違いない。その部分をつぶさに眺めるならば、よろいかぶとをまとった中世の騎士の横向きのシルエットに似ていないこともないだろう。このシルエットの前後の外郭にそって南アの最も高い峰々を連ねた二列の嶺線が南下している。

騎士のかぶとの突出した頂上の部分に間の岳があり、これより、嶺線は東西に分れる、騎士の前面のシルエットすなわち、かぶとのひさし、鼻、あご、のど、胸へと流れる線上に、北から塩見・荒川・赤石・大沢・兎・聖などの南アルプス中の主な峰々が連なり、さらに南下して、茶臼・光（テカリ）と連なってゆく。これに対して騎士のシルエットの背面にそった山々は、高さでは前面のそれに及ばない。農鳥を最高峰として、策ヶ岳・青雉山と徐々に高度を下げつゝ南下しているのである。

東西に分れ南北に連なるこの二つの嶺線の真中に大井川の本流が

もくじ

・南アルプスの自然	
杉山 恵 一……………	1
・私のすすめたい本・30	
家庭の医学書	
榎本 浩 昌……………	3
・新聞にあらわれた	
郷土資料	
(昭和50年1月—6月分)	
……………	4
・増加図書統計	
昭和49年度……………	6
・雑誌受入種類数	
昭和49年度……………	6
・附属図書館委員会報告	
……………	6
・おしらせ(本館)……………	6
・人事異動(本館)……………	6

ある。それは間の岳真下に源を発し、東西嶺線の茶臼と青雉山を結ぶ線の直下に畑窪湖、さらに下流に井川湖という二つの人工湖を形づくっている。

南アルプスの深奥部を訪れるためにはこの本流ぞいの道を畑窪湖を越えてさかのぼらなければならない。手つかずの自然はこの湖の上流から始ると考えて良い。湖のはずれから2キロあまりの所に流域最大の吊橋があり、南アを中心をなす西の嶺線への玄関口になっている。こゝから茶臼岳ととりつき、南下すれば光岳に達する。光岳より嶺線は二又に別れ、大井川の一支流寸又川をはさんで南下するが、いづれも人踏稀な地域となる。この西の嶺線一帯は、最近原生自然保護地域として指定された。茶臼より北上すれば聖・赤石・荒川・塩見等を連ねた南アの屋根を通過することになる。

大吊橋を左に見ながら更に本流をさかのぼると、やがて青雉山登山路の指導標を見ることだろう。県境の東嶺線へのとりつき口である。道はそれから先西側嶺線へのいくつかの登山口を示して樺島をへて二軒小屋にまで達している。

南アルプスの山々の特色は、深い森林に包まれた丸々とした山容である。樹木や下草はかなりの標高に達するまでは我々静岡県人にとって見なれた種類つまり暖地系のそれが多く、登山口から数時間は巨大な裏山といった感じである。岩石と北方系の植物によって構成される北アルプスの風景はアルプスの名にさほど異和感をおぼえさせないかもしれない。しかし、南アルプスは景観上も植物相からも断じてアルプスではあり得ないのである。

南アルプスのどの嶺をみざすとしても、登山口から頂上までの自然のうつり変りにはさほど大差ない。本流ぞいの登山口附近の標高は六百―千米程度であり、この附近での植物相は落葉樹林帯のそれである。ミズナラ・ヤマハンノキ・オオカメノキ・バッコヤナギ・リヨウブ・ハウチワカエデ・イタヤカエデ・ウラジロモミ等が密度の高い森林を形づくっている。下草にはミヤマワラビ・オンダ等豊富なツダ類が見られ、ホトトギス・フシグロセンノラ・キツリフネ・ソバナ等が季節々々の花を飾っている。林道附近にはタラ・ヤマハンノキなどの低木の下にタケニグサ・フジアザミなどが見られ、ヒメジョオン等の帰化植物も普通に見られる。河原の砂地にはシナノナデシコが多く、夏の間美しい花を咲かせている。

登山道から1・2時間樹相は大して変化を見せない。夏場ではどこから現れるのかしじゅう大きなウシアブが身体にまといついて苛立たせられる地帯である。

この地帯を離れるはっきりした境い目はない。たゞブナ・ダケカンバなどの樹木がだんぜん巾をきかせはじめ、コメツガ、シラビソ・オオシラビソなどが目立ちはじめると、空気に爽かさを感じはじめ、木々の間から多少の眺望がひらけはじめる。このあたりからウシアブに代って、ブユの大群が休むたびに身体をとりかこむようになる。

さらに登ると、シラビソ・オオシラビソなどの純林を通過したり、ダケカンバの巨木が岩を抱くようにしている根っこをまたいだりするようになる。所々で頭上が明るくなり、巨大な峯々をかいま見たりするようになる。このあたりが標高二千四百メートルをこえるあたりである。

二千五百メートルにさしかゝると、さしもの樹木もその密度を感じ、陽ざしのもとに可憐な花々を見るようになる。イブキトラノオ・マルバダケブキ・タカネコウリンカ・ハクサンチドリ・グンナイフウロなどがそれで、このような花々が密生した場所がいわゆるお花畑である。お花畑が発生する場所は多く水脈にあたるため、山小屋が営まれるのもまたこのような場所である。お花畑とゴミの山が共存するのは残念なことではあるけれど、

三千メートル附近がいわゆる高山帯で山岳宗教の世界である。突然ダケカンバの林がとぎれ、山頂まで続くハイマツの原が出現する。ところどころに岩塊が荒々しいたゞずまいを見せ、時に神秘的な風貌を想像させたりする。ハイマツの下には、豊富な地衣相がみられ、またコケモモなども可愛らしい姿を見せている。岩塊の間には、キソチドリ、チシマギキョウ、チョウノスケソウなど、本格的な高山植物が短い夏にケンを競っている。

我国のように歴史も長く、人工密度の高い島国に、南アルプス一帯のような原始状態に近い自然が残されていることは稀な例であろう。古代史に名高いレバノン杉の本場のレバノンが現今では半砂漠であることを想う時、自然は決して不死身ではありえないのだという事実を悟るのである。南アルプスの自然は今や大規模な破壊に面しつつあるが、少くともその中心の部分だけは現今の姿のままに残すことが、この国の歴史の現在を担当する我々の努めではないだろうか。

(教育学部 生物学)

私のすすめたい本・30

家庭の医学書

榎本浩昌

最近、かかりつけの医者でもないと、夜、往診してくれる開業医はまず珍しい。その代わりに、夜間救急センターなどを設置して、医師が交替で詰めているところだの、病院が交替で夜間の救急処置を受け持っているところだの、種々の対策が講じられてはいるが、それでも、日によって当番病院がひどく遠いとか、病院をたらい回しされたとかの問題が少なくない。そのため、たとえば、大きなけがや火傷の場合など、病院へ行くまえに家庭で行った処置のよしあしが予後を大きく左右することになりかねない。一方、医師の側、特に小児科の医者などからは、若いお母さんがたが、赤ちゃんの何でもない病状の変化を気にして連れてきたりするため、夜間救急センターが夜間診療所のようになってしまう、ほんとうに急を要する患者さんが手おくれになってしまうおそれがあるという意見が多いようである。もちろん、患者さんがたが、自分の判断を過信することは危険であるが、じょうずに医者にかかるためにも、ある程度医学知識をもつことは必要ではないかと思われる。そこで、以下、一般向け医学書のうち、まず、全科を扱ったものと雑誌について紹介したい。

1. 吉利和他編集、全科 家庭医学全書、昭和47年1月、社会保険出版社(2,200円)
 - (1) 家庭の救急処置、(2) 症状を観察する、(3) 病気とその治療、(4) 日常の医学知識の4章からなっているが、第3章では、かなり珍しい病気や予防注射の受け方などについても解説されている。第4章では、ドックの知識、妊娠・分娩の正しい知識、家族計画と受胎調節、結婚の医学、結婚と遺伝、食事療法の実際、物理療法・温泉療法・漢方と鍼灸の知識、薬の正しい使い方などが取り上げられているほか、交換輸血や人工腎臓等特殊な治療ができる病院名まで表になっており、全般に、広い分野の事柄が要領よくまとめられている。
2. 家庭の医学 国民医学大事典、昭和49年3月、保健同人社(3,500円)
 - (1) よい医療を受けるために、(2) 応急処置、(3) 症状からみたからだの異常、(4) 病気の知識、(5) 子供の病気と育て方、(6) 暮らしと健康の医学の各章からなり、1同様、全科にわたってわかり

やすくまとめている。

3. 新赤本 保健同人 家庭の医学、昭和48年11月、保健同人社(2,500円)

上記2冊とは多少違った編集方針がとられ、医者にかかりにくい僻地などでも役だつよう、家庭のできる治療法について、できるだけ詳しく述べているのが特徴である。また、各項目も、百科事典式に羅列することはやめ、病気—特に一般的な病気—を中心にまとめている(たとえば、慢性関節リウマチの項をみれば、物理療法や温泉療法の項を引きなおさなくてもよいようになっている)。

4. 現代家庭医学百科、昭和49年10月、主婦の友社(4,600円)

かなり詳しい人体解剖図譜がついているほか、従来の同種の図書が扱っている項目に加えて、特に「知っておきたい医学知識」と「話題の医学」の二章が設けられ、最新の問題を紹介しているのが特徴である。すなわち、「知っておきたい医学知識」では、自律神経や免疫の問題のほか、「診断と治療の進歩」が取り上げられ、先天異常の早期発見、人工腎臓、化学療法、内視鏡(胃カメラその他)、放射線や超音波による診断や治療が紹介されている。また、「話題の医学」では、最近特に話題になった医学用語を集めて、数行の解説が加えられている。

同種の本は、他にも何冊か出版されているが、医学のある分野、特に最近新しい発見や技術の開発があった領域では、数年もすると、病気や治療法に対する考え方が、がらりと変わってしまう場合も、決してまれではないため、比較的新しく出版(または改訂)された上の4冊を選んでみた。一般の家庭や寮では、予算や目的に応じて、どれか一冊備えれば充分であろう。

なお、できれば、そのうえで、月刊雑誌一冊を毎月購読したい。その後の新しい考え方を知らずと、ほとんどの月刊誌が、毎月何らかの疾患や症状などについての特集号になっており、事典式のものに比べて、より詳しい知識が得られるためである。雑誌としては、

からだの科学 日本評論社
毎日ライフ 毎日新聞社

などがあるが、前者はやや専門的で、ある程度医学知識がないと理解し難い場合がある。後者がより一般向きであろう。

(保健管理センター)

新聞にあらわれた 郷土資料

(昭和50年1月～6月分)

- せおりど 第4号 糠谷正次等編 静岡(1・6)
- 育児シリーズ 第3号 心配な幼児② 静岡県児童相談所
静岡(1・7) 読売(1・11)
- やんもの村のものがたり 八幡野郵便局員 朝日(1・7)
- 東海自然誌 創刊号 静岡県自然保護協会 静岡(1・9)
- ゆめ・父の思い出 石原あき著 読売(1・11) 静岡(1・20)
- 詩集・投降の季節 荒谷わたる著 読売(1・11) 朝日(1・11)
- 魚との出会いとその別れ 巴一平著 読売(1・11)(2・8)
- 六人っ子 丹羽健 加藤一重編 毎日(1・11)
- わが浜名湖 清水みひの著 サンケイ(1・12) 読売(3・16) 静岡(3・17)
- 新成人のしおり 賀茂村教育委員会 東京(1・16) 中日(1・16)
- 御殿場市史 第1巻 東京(1・18) 毎日(1・18) 静岡(2・17)
- 歌集・童女半跏 大岡博著 読売(1・18)
- 詩集・偽善者 小河内真著 朝日(1・18)
- 御殿場の青年群像 御殿場市教育委員会 静岡(1・20)
- 思い出のしずおか 小川竜彦著 中日(1・21)(2・25)(3・12) 東京(2・25)
- 軛(とも) 海坂俳句会磐田支部 中日(1・22) 読売(2・15)
- 駿河古文書会原典シリーズ 中日(1・24) 静岡(1・25夕) 朝日(1・26)
- ふるさと百話 第12巻 静岡新聞社 静岡(1・25)
- 私の中の道祖神 吉川静雄著 朝日(1・25) 静岡(1・25)(3・24) 読売(2・15) 東京(2・25)
- てのひら歌集 鈴木寛子等著 静岡(1・24夕) 朝日(1・25)
- 日本語および日本人の起源 寺尾平一著 読売(1・25)
- 浜松市史 第3巻 中日(1・28)
- 木蘭 木蘭会短歌同好会 静岡(1・30)
- 市勢要覧・静岡 静岡(1・30) 読売(1・31) 中日(2・4)
- 沼津本町資料 付沼津三町の考察 駿河図書館 静岡(1・30夕) 読売(2・8) サンケイ(2・22) 東京(2・27) 朝日(3・1)
- 寺院戸籍一覧表 浜松文化財調査会 読売(2・1)
- 石藁(せきふん) 点字版 伊藤祐輔著 朝日(2・1)
- 学級新聞「輪」 賤機南小学校6年1組 静岡(2・2)
- 盈進幼稚園五十年史 静岡(2・3)
- 常磐区史(富士宮市) 矢辺繁吉著 静岡(2・3)
- 三ヶ日町の文化財 三ヶ日町教育委員会 読売(2・4)
- 7・7集中豪雨の記録「どろ」 清水市立第六中学校 静岡(2・5) 読売(2・5) 中日(2・7)
- 私たちのまち・ゆうとう 雄踏町 静岡(2・6夕) 中日(2・7)
- 寿 吉田町老人クラブ連合会 中日(2・7)
- 静岡市中心街誌 付年表 中日(2・6夕) 静岡(3・4) 日本経済(3・4) 中日(3・5夕) 朝日(3・24)
- 静岡県自然「春の植物」 静岡新聞社 静岡(2・7)
- 権 本宮鼎三著 静岡(2・7)(3・24夕)
- くらしの豆知識 第2号 静岡市 読売(2・7) 中日(2・9)
- 伊豆半島沖地震災害警備誌 静岡県警察署、
七夕豪雨災害警備の概況 静岡県警察署 静岡(2・8) 読売(2・8) 朝日(2・8) 毎日(2・12)
- 沼津市誌 復刻版 沼津市郷土研究会 朝日(2・8) 静岡(3・3)
- ふるさとのよもやまばなし 静岡県福祉事務所 静岡(2・11)
- 北安東風土記 小林鎌一著 静岡(2・10) 朝日(4・6)
- 市民べんり帳 沼津市 読売(2・12) 日本経済(2・15)
- 史と景 天竜市 中日(2・16)
- いのちの火 北山宏明著 静岡(2・17) 東京(2・20)
- 草木鳥虫 白井善司遺歌集 静岡(2・21)
- 静岡市史 近世史料 第2巻 中日(2・24) 東京(2・20)
- グループの歩み 木の芽会(小山町) 読売(2・24)
- 海底火山の謎 西之島踏査記 東海大学 静岡(2・24夕)
- くらしと消費 静岡県 中日(2・27) サンケイ(2・27) 静岡(2・27) 日本経済(2・27) 読売(3・1) 毎日(3・7)
- あばれ水 七夕豪雨の記録 朝日(3・2) 静岡(3・2) 中日(3・2)
- オレンジア - 静岡鉄道(株) 静岡(3・2) 日本経済(3・5)
- 社協はまきた 浜北市社会福祉協議会 静岡(3・3)
- 障害者ガイドブック 静岡版 日本青年奉仕協会 静岡(3・4)
- 東海道遠州見付宿 磐田市誌シリーズ 第2号 静岡(3・3夕) 中日(3・19)
- 安全読本 静岡交通安全対策室 中日(3・6夕)
- 病院だより 焼津市立総合病院 静岡(3・10)
- 遠鉄バンビツアー全国観光ガイドブック 遠州鉄道(株) 静岡(3・10)
- おかあさんちょっとまって 磐田署 中日(3・14)
- わが青春の日々 毎日新聞社 毎日(3・15)(3・26)
- 金蘭集 県立静岡城北高通信制生徒会 読売(3・15)
- 災害の手引き 静岡県商工部 日本経済(3・16) 日刊工業(3・17)
- 佐々木松次郎画集 佐々木忠夫編 中日(3・17)
- あたみの女 市川智之著 静岡(3・17)
- あおば 創立二十周年記念特集 静岡市立青葉小学校 静岡(3・17)
- とわの歌声 静岡(3・17夕)
- 開拓珠寶 第2号 静岡(3・21)(4・27) 朝日(5・10)

- 近世文学解説本 佐野保彦著 静岡(3・19夕)
 五十年のあゆみ 伊東市立伊東幼稚園 静岡(3・24)
 わがまち・あらい 新居町企画課 静岡(3・25) 中日(5・30)
 速江飯田郷土誌 中島長平著 静岡(3・26夕)
 維新前後の静岡 小山枯紫著 静岡(3・28)
 青春 若い根っこの会静岡西部支部 中日(3・27)
 びっかぶ 創刊号 静岡(3・31) 毎日(4・4)
 赤佐小学校百年の歩み 静岡(3・31)
 ほそえ 細江町20周年記念誌 中日(4・2)
 静岡の友釣り 上 静岡新聞社 静岡(4・4)
 静岡藩始末 三枝康高著 朝日(4・5) 静岡(4・25)
 (6・22) 中日(6・22)
 地域の屋号について 静岡(4・7)
 駿河国安倍郡門屋村白鳥家文書目録 静岡市立図書館 毎日
 (4・12)
 ルンンの小石 榎木淑子著 静岡(4・14) 中日(4・17)
 朝日(5・3)
 戦没者名鑑 引佐町社会福祉協議会 静岡(4・14)
 句誌「蛙」 蛙の会 静岡(4・14夕)
 郷土読本 復刊 岡部尋常高等小学校 静岡(4・18)
 駿河の今川氏 今川氏顕彰会 読売(4・19) 静岡(4・
 26夕) 中日(5・5) 東京(5・5)
 グラフで見る静岡 静岡市調査統計課 静岡(4・19)
 ふるさと百話 第13巻 静岡新聞社 静岡(4・25)
 戸田号建造物語 飯塚つとむ著 静岡(4・25)
 戦後静岡家具産業史 藪本正義著 静岡(4・30夕)
 メガロポリスの森への招待 静岡県林業会議所 中日(5・1)
 北安東文芸 静岡県農業試験所文芸集団 読売(5・3) 静
 岡(5・19)
 七夕豪雨記録写真集 清水市広報課 静岡(5・4)
 光明小学校開校百年記念誌 静岡(5・5)
 竜燈(浜北の歴史) 静岡(5・5)
 伊場遺跡第六・七次発掘調査概報 浜松市教育委員会 中日
 (5・8) 静岡(5・7夕) 毎日(5・27)
 天竜市史 史料編 第2巻 中日(5・8) 読売(5・17)
 静岡県の自然 夏の植物 静岡新聞社 静岡(5・9)
 わたくしたちの静岡 静岡新聞社 静岡(5・9夕)
 もう悲しいことは平気です 静岡市交通遺児励ます会 静岡
 (5・11)(7・27) 読売(5・11) 中日(5・11)(6・
 28) サンケイ(5・21)
 浜松市民文芸 浜松市教育委員会 中日(5・12)
 めぐみ 金原戒雄編 静岡(5・12)
 神立(かんだち) 富士宮俳句協会 静岡(5・12)
 [熱海の植物目録] 角田春彦著 サンケイ(5・14)
 異国漂流奇譚 現代語版 豊田茂雄訳 中日(5・16) 静岡
 (5・17夕)
 静岡の友釣り 下 静岡新聞社 静岡(5・16)
 静岡市史 近世史料 第二巻 静岡(5・17) 東京(5・19)
 中日(5・19)
 山中城跡 三島市教育委員会 朝日(5・17)
 和紙 後藤清吉著 朝日(5・19夕)
 議会だより 春野町議会 静岡(5・20夕)
 ようこそ藤枝へ 藤枝市 静岡(5・21夕)
 沼津空襲日記画 佐々木古桜画 サンケイ(5・26) 東京
 (5・27) 朝日(5・31) 読売(5・31) 静岡(6・9)
 東京(8・15)
 続あゆみ 長谷川澗・喜久著 静岡(5・26) 読売(6・7)
 富士あざみ 御殿場西中学校 静岡(5・26)
 網代郷土史 大高吟之助著 毎日(5・27) 読売(7・12)
 ふるさとに生きるうた 静岡県教育委員会 静岡(5・27)
 [「新しき村」の回想録] 松本長十郎著 読売(5・29)
 井川村史 第2巻 宮本勉著 静岡(5・29夕)(8・15)
 朝日(6・22) サンケイ(8・2) 読売(8・23)
 静岡市町名の由来 鈴木雄蔵著 静岡(5・30) 中日(5・
 30) 読売(6・20)
 磐田市誌資料目録 第1集 磐田市誌編さん室 読売(5・
 31)
 中国気象学史研究 田村専之助著 朝日(6・1)
 坊工伝 須田昌平著 静岡(6・2)(8・15)
 かしこい消費者シリーズ 浜松市 読売(6・4)
 史跡山中城跡 II 三島市教育委員会
 初音原寺屋敷遺跡発掘調査概報 三島市教育委員会 朝日
 (6・7)
 霧の森 菅沼五十一著 静岡(6・9)
 熱海商工名鑑 熱海商工会議所 朝日(6・11)
 山椒 第30号 国立駿河療養所同人 読売(6・14)
 大仁町誌編集資料 第6集 読売(6・14)
 英霊名鑑 島田市遺族会 静岡(6・14) 中日(6・14)
 (6・25) 読売(6・24)
 季刊清水 創刊号 戸田寛編 朝日(6・15)
 裾野市文化財のしおり 裾野市教育委員会 静岡(6・16)
 再開発の手引き書 静岡市 中日(6・16夕)
 自治会と神社 浜松市憲法を守る会 朝日(6・21)
 野火 第50号 朝日(6・21)
 ふる里の遺跡 浜松西郵便局 中日(6・22)
 こえ 細江親と子のよい映画をみる会 静岡(6・23)
 南アルプス・奥大井学術報告 静岡県自然保護協会 朝日
 (6・24) 静岡(8・3)
 予防接種について 薬科勝治著 朝日(6・26) 静岡(6・
 26) 東京(6・26) 中日(6・26) 毎日(7・4)
 ふるさと百話 第14巻 静岡新聞社 静岡(6・27)
 潮騒 伊藤有山著 静岡(6・27)
 よい環境のなかで生活を 焼津市 静岡(6・27) 毎日
 (7・4)
 塩 創刊号 朝日(6・28) 静岡(6・30)
 歌集「椿」 木俣陽吉著 静岡(6・30)
 交番だより 浜松中央署 静岡(6・30)
 あゆみ 鷺津中学校 静岡(6・30)

この目録は、昭和50年1月～6月に静岡新聞及び朝日・毎日・読売・中日・東京・サンケイ・日本経済・日刊工業新聞の地方版にあらわれた郷土資料の記事を書名・著編者・新聞名(日付)順に記載しました。

■増加図書統計 昭和49年度

	本館			浜松分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
0 総記	623	201	824	157	2	159
1 哲学	465	362	827	19	4	23
2 歴史	1,127	174	1,301	24	0	24
3 社会	4,190	1,344	5,534	22	0	22
4 自然	879	1,618	2,497	608	978	1,586
5 工学	591	96	687	888	410	1,298
6 産業	1,014	174	1,188	6	1	7
7 芸術	309	210	519	13	0	13
8 語学	526	329	855	22	1	23
9 文学	965	1,033	1,998	59	0	59
計	10,689	5,541	16,230	1,818	1,396	3,214

■雑誌受入種類数 昭和49年度

		本館	浜松分館
総受入種類数		4,380	1,217
購入	和書	668	286
	洋書	750	373
寄贈交換	和書	2,055	450
	洋書	897	108

じょうほうじょうほうじょうほうじょうほうじょうほうじょうほうじ

前期試験期(昭和50年9月5日~23日)の延長
開館(平日 17:00~19:30)の利用状況
土曜日 13:00~16:00

月・日・曜日	18時の 閲覧者	19時の 閲覧者	17時以後 の入館者	17時以後 の貸出冊数 (開架)	(閉架)
9.5 金	49	18	20	6	0
6 土	79	79	121	18	0
8 月	58	33	17	4	1
9 火	51	13	20	4	1
10 水	84	30	19	14	0
11 木	63	31	14	3	0
12 金	52	30	19	10	0
13 土	136	125	213	43	0
16 火	80	39	25	18	1
17 水	61	37	15	30	2
18 木	69	42	11	11	1
19 金	82	45	20	13	0
20 土	114	97	164	31	3
22 月	64	24	14	10	1
23 火	32	15	13	16	3
合計	1,074	658	705	231	13
1日平均	71.6	43.9	47	15	0.9

*土曜日は、17時、18時、19時を13時、14時、15時と読み換えてください。

■附属図書館委員会報告 (昭和50年度)

(第3回) とき: 50・6・14 ところ: 本部

(1) 昭和50年度図書館維持費について審議し、昭和50年度予算額を了承した。

(2) 指定図書リストについて検討し、これを原案通り了承した。

(第4回) とき: 50・7・21 ところ: 本部

(1) 学生用図書購入費の運用の方法について検討した。

(第5回) とき: 50・9・9 ところ: 本部

(1) 大学の研究・教育に対する図書館のあり方とその改革について協議し、共通見解は一本にまとめ、その他については各学部の意見・要望等を併記して館長より学長に報告することとした。

おしらせ (本館)

(1) 冬期休暇中の長期貸出

イ 貸出冊数 4冊まで(指定図書は2冊まで)

ロ 貸出日 12月4日(木)~6日(土)

ハ 申込期間 11月29日(土)まで

ニ 申込要領 ○窓口③番にある申込用紙を用いて下さい。

○申込用紙には必ず指導教官またはこれに代るべき教官の捺印を受けて下さい。

ホ 返却期間 1月12日(月)~14日(水)

*なお、長期貸出準備のため、11月26日(水)~12月3日(水)の間、通常の貸出を停止します。

(2) 休館

12月25日(木)~1月5日(月)

(3) 延長開館

・ 1月16日(金)~2月25日(水)

・ 月~金 9:30~19:30

土 9:30~16:00

■人事異動 (本館)

一 辞職一

鈴木美佐子 総務係(昭和50年8月31日付)

■編集後記

「図書館通信」第34号をおとどけます。編集に対する意見をおしらせ下さい。次号は「図書館問題特集」を予定しました。